

一見ほうれん草に似た作物が十勝の畑地に勢いよく育ちつつある。今は優にほうれん草の丈を越している。十勝地方では、小麦、玉蜀黍(トウモロコシ)、甜菜(てんさい or ビート、beet 又はサトウダイコン)、小豆等を畑地の地力を維持するために輪作している。十勝の夏の畑はこれ等の植物で賑わっている。一度、直に甜菜をかじって見たいと思っている。当然ながら、甘味はあるらしい。

北海道ホテルの隣に『とてっぼ通り』と、異邦人の小生等には全く意味の解らない通りが存在する。アイヌ語かと思いきや、そうではなくて、「十勝鉄道」の愛称である。トカチのポッポだから「とてっぼ」なのだろう。正式の鉄道ではなく、所謂軽便と呼ばれるものである。

大正 9 年、河西郡大正村(現帯広市稲田町)に製糖工場が設立され、国鉄受け渡し線より工場前まで、ビート輸送専用線が敷設され、大正 12 年に鉄道事業が独立し「十勝鉄道」となる。ビート作の広がりと共に十勝鉄道も逐次に延伸、昭和 4 年には総延長 65 キロ以上となる。ピーク時の貨物取扱量は年間 4 万トンである。昭和 21 年には、河西鉄道を吸収し営業キロ 87.7 キロの道内一の鉄道会社となる。道路交通の発達により、十勝鉄道は昭和 34 年 11 月 15 日廃止された。現在、日甜帯広工場は、製糖業務を止め通称「ビート資料館」(正式名称は日本甜菜製糖(株)ビート資料館)になっている。同資料館敷地内に行幸記念碑があることを考えると、当時における甜菜製糖の重要性が浮かんで来よう。(蛇足ながら、気を付けて頂かなくてはならないのは日曜日は休館日であるということである。)資料館横に遊休地があるが、そこは社宅だったのである。バス停の名称が「日甜社宅前」となっているので、窺い知ることが出来る。

この資料館以南の鉄路跡は、畑や道道であり、その軌跡を伺い知ることは、出来ないようだが、先ほどの北海道ホテルの横から資料館までを、「とてっぼ通り」として整備し、公園として、市民に親しまれている。当時使用された「蒸気機関車 4 号と客車コハ 23 号」が通りに陳列されており、往時を偲ばせる。



トテッポと愛称された十勝鉄道は、ビートの輸送のみではなく、交通網が未発達だったこともあり、沿線住民の足としても利用され、地域開拓の面でも大きな貢献をしたと言われている。当時の軽便鉄道というのは、客車が外れやすく、気付いたときには、客車が川に落ちていたとか、冬季には、ブレーキが利かないのでお客までも総動員して足踏みブレーキを掛けたとか、停車していた筈の汽車が居なかったとかというエピソードには事欠かないようだ。十勝鉄道の末裔がいる。日本甜菜製糖は現在では最新鋭の機械を揃えて、芽室の工場で製糖作業を行っているが、その工場まで専用線が敷設されている。西帯広から芽室工場までの 2.2 キロが、日甜線となっている。この末裔も何れは廃線の憂き目を見ることになるのだろうか？

さて、砂糖即ち通常「蔗糖」は、甘薯(サトウキビ)と甜菜(サトウダイコン)から採取される。考えてみれば沖縄にも勤務し、十勝でも勤務した訳であるので、日本における砂糖の最大生

産地の何れをも経験したことになる。サトウキビの刈り入れ時に援農をしたけれども、かつては、そういう時代があったのだと懐かしく思い出す。

甜菜は、地中海地方が原産のアカザ科の仲間で「ほうれん草」と同じ種類である。道理で似ている筈だ。サトウキビを「でかいススキだ」という観光客もいるがビートを「大きいほうれん草」と吃驚する観光客もいるのではなかろうか。世界の砂糖生産の40%は甜菜からである。日本では北海道だけで栽培されている。約7万 ha である。甜菜糖は、1747年ドイツの化学者が甜菜の根から分離することに成功したことに始まる。ナポレオンによる大陸封鎖によって砂糖が急騰したので、甜菜糖の製造が奨励された歴史がある。

日本では、明治3年(1870年)北海道で栽培を試したが、上手くいかず、明治11年のパリ万博に参加した松方正義が本格的な導入を決意し、紋別(現在の伊達市)に官営の製糖工場を建設して明治14年操業開始した。爾後民間に移管されたものの明治29年には解散に追い込まれた。札幌にも現在のサッポロビール園の地に製糖工場が建てられたが、明治34年には閉鎖された。何れの製糖工場も原料の確保や輸送手段に問題があったために閉鎖に追い込まれたのである。松方正義の孫の松方正熊が興した北海道製糖と旧日本甜菜製糖の2社が、十勝の帯広と清水に工場を建設し、操業を開始したのが、大正8、9年のことである。20年ぶりの甜菜製糖の復活であるが、爾後も苦難の道を歩かざるを得ず、両社は実質的に合併して、日本甜菜製糖(株)となっている。

ビート栽培が始まった年は、多雨や日照不足で収量は芳しくなかった。労働力不足や地力減退によっても収量が落ち込んだときもある。戦後は、「国内甜菜糖買い上げ」、「甜菜生産振興臨時措置法」等々の国策もあり、回復基調に転じたが、栽培技術の未熟さが祟って収量は20トン程度であったらしい。これを一変させたのが、「ペーパーポット」(即ち紙筒移植という方法だ。)という栽培技術の発明だ。これによって飛躍的に収量が伸び、現在では、1ha当たり60トン前後である。名実共に十勝のビート栽培は道内トップである。

十勝小唄なるものがある。「広い畑に 煙突が見ゆる／あれはビートの製糖会社／亜麻やベニヤの工場も御座る／熊の古巣は何処へやら」「十勝小唄」の中にあるこの「煙突」は、大正八年(1919年)北海道製糖が大正村(現帯広市稲田町)に建設した帯広工場の煙突のことである。原野にこつ然と立つ製糖所と高さ六〇メートル、直径三メートルを超す巨大な煙突は、地域発展の息吹を伝えると同時に、ビート産地・十勝のシンボルとして長く親しまれた。芽室工場にも大きな煙突があり、白い煙を吐いているので何処からでも遠望出来る。

先号で屯田兵のことについて述べ、今回甜菜を調べて面白い共通事項に気付いた。何れにも明治時代の薩摩出身者が重要な役割を果たしているということである。北海道に勤務する鹿児島出身者としては少しばかり誇って良いのかな。

(参考：各種HP、その他)